

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2011年 9 月 20 日

第 341 号

歴史を否定せず

新しい実践に踏み出す

関係論に立つ福祉実践⑤

理事長 稲松 義人

社会福祉法人としての事業全般の責任を負うのは理事会ですが、小羊学園では日常的な事柄は理事長を中心とした執行役員会での協議にゆだねられています。執行役員会の役割を分担し、法律や制度に合わせて効率よく事業を運営するための財務管理、労務管理、日常の事務の効率化などは事務管理会議で協議します。事務管理会議のもとには各施設・事業所で実際の事務業務を担う職員による事務担当者会議があります。

また、小羊学園のあるべき姿を問いつつ将来の事業展開について協議するために事業企画会議を設け、事業企画会議の下に、各施設、事業所で利用者支援を担う職員の代表からなる支援担当者会議があります。

さて先日、支援担当者会議が開かれ、今年度の公開講演会はどんなテーマで開催するかという意見交換がなされました。昨年度は、入所施設のあり方を問い直すことをねらいとし、施設のあるり方について辛口の講演をお聞きしたのですが、講師から、入所施設への否定的な見解とともに三方原スクエア、

支援センターわかぎの不十分な点を指摘されました。確かに反省すべきところはありましたが、将来に向けて意欲が湧いてくるような結果が得られなかったという感想でした。それを受けて今年度は、利用者の支援にあたって職員が元気になるような講演会にしたいという要望が出されました。

小羊学園は45年前に入所施設から事業を始めました。入所施設での支援をしながら、できる範囲で様々な工夫をしてきたのだと思っています。今は通所の事業所も数か所になっています。ケアホームの運営も始まっています。しかし、入所施設だからこそ担える役割もあるのではないかと思いつつ、今後のあり方を検討しているのも事実です。入所施設を全面的に廃止しようという議論は出てきません。

確かに、入所施設では知的障がいのある人の人権を守ることが難しいという指摘はありますが、かつては入所施設も知的障害の子どもたちの人権のことを思っではじめられたのだと思います。家族では抱えきれず学校に通うことも許されず、座敷牢のようなところで生活をしていた時代に、入所施設で障がいのある子どもたちを受け入れました。その時代に様々な困難の中で施設を創設した先駆者たちの苦労を肯定することができのでしょうか。

十分な運営費が得られない中で、少しでも生活環境を改善しようとして、

小舎制による生活にチャレンジした先輩たちの努力はむなしなことだと言いつけるのでしょうか。施設の中で活動に甘んじるのではなく活動の場を地域の中に求めた過去の試みを笑うことができるのでしょうか。

実際には、今も新たに入所を希望するケースがありますし、児童期から入所施設で受け止めざるを得ない事例が多く対応に苦慮しています。

少し前に「『社会』というのはシステムではなくプロセスではないだろうか」という内容の本を読みました。現状をシステムだと考えると、古いシステムを否定することから新しいものが生み出されてくるのかも知れません。小羊学園の実践をシステムでなくプロセスだと考えるならば、これまでの歴史を受け継ぎつつ、いつもその時代に合わせて変えられていくのだと思います。支援スタイルは、時代の流れの中で少しずつ新しいものへと変えられていくでしょう。そしてその努力は今も続けられていると信じています。

そこに一貫してあるのは、目の前にいる人(支援を必要とする人たち)の生活を見つめる実践です。今という環境の中でその人たちの生活に向き合い関わり続けている実践です。私たちの実践もまた本当の福祉を実現しようとする一つのプロセスとして、歴史の中にあるのです。そしてともに歴史の中に生かされていることが喜びです。

夏の思い出

たくさん遊び、楽しい思い出ができたよ！



今年も暑い夏でした。その暑さに負けず特別支援学校
夏休み期間に、子どもたちのためのプログラムを組んで、
育ちを支えている4事業所の実践報告をします。

わたぐも幼児部の夏

わたぐも 高木 君江

暑い季節がやってきました。わたぐも幼児部もプール活動を中心に夏の思い出をいっぱいつくりました。

現在わたぐも幼児部は、8名在籍で6名が気管切開し、そのうち3名が人工呼吸器を使用しています。プールでも、その他の活動でも十分な配慮がかけられません。それぞれの障害像や個性に合わせ、難しいと思われる事も提供の仕方を工夫していろいろな体験をさせてあげたい、一緒に楽しみたいという気持ちで職員は取り組んでいます。

まずプール活動を始める前に、一人ひとりがプールに入る5分〜10分の時間の中で充分に楽しめるように、子ども達と一緒に会議を開き、何をどうやって使ってプールで遊ぶかを相談しました。そして、個々が自分が遊ぶ玩具を製作することを決めて、ペットボトルを利用して、セロファン、モールなど

で飾り、タコ、ブタ、サカナ、潜水艦など個性的な玩具が出来上がりました。又、大きなペットボトルを4本使い、乗れる大型潜水艦も完成し、準備万端です！

さあプールが始まりました。自分の作った玩具を持って入り、浮かべたり沈めたり：肌で感じる水の感触や手足を水中で動かす感覚を体験しました。子ども達のちょっと不安な表情、そしてその後のうれしそうなお表情、笑顔があふれる活動ができました。



ぱびるすの夏休み

ぱびるす 森下 理恵

「今日はプールある？どこにでかけるの？」「プールあるよ、今日は公園でセミとりをしよう」夏休みに入りぱびるすにやってくる子どもたちとの会話には、日常と違う夏休みを楽しもうとしている様子がかがえます。

朝9時「おはよう」と子ども達の登園が始まります。宿題のある子ども達は、グループになって宿題を始めるよう促されます。「プールやりたいよ〜」早速、遊びたがる子ども達をなだめるスタッフの姿は、毎日の恒例です。宿題を終わった子どもからプールの準備が始まります。終わっていない子ども達は、それを見ながら急ぎます。「計算違うよ」焦る子どもは間違えがちです。「はいやり直し」「え〜いいじゃん〜」「残念、ダメです」こんなやり取りも夏休みならではの楽しい光景になりました。ご多分にもれず今年も、ぱびるすも節電の夏でした。そんな中、例年以上にプールがフル稼働でした。

この夏休みのぱびるす利用は、13の学校から1ヵ月に80人程度でした。異年齢で学校も違う子ども達ですが、いつも一緒にいる仲間のようにすぐに仲良くなってくれました。こうした様子を見て、夏休みを通して日常と違う仲間と一緒に過ごすことも、よい経験に

なったのではないかと感じました。ぱびるすでの夏休みが、子ども達の思い出の一コマになったとしたら幸いです。



電車とバスを利用しての 昼食外出

ドルチェ 原田 麻衣

8月10日、ドルチェ『初体験』。公共交通機関を利用し、昼食外出をしました。行き先は、なゆた浜北内にある「なないろカフェ」です。外出前から、子ども達は、おいしそうなお写真が載ったメニュー表を眺め、何を食べようかお家の方と話し合い、メニューを選択しました。お家の方もこの時ばかりは大奮発。デザートもしっかり注文！

そして、初体験当日。子ども以上に職員が緊張感を漂わせる中、5〜10人のグループに分かれ、時間差で出発。南区役所前からバスで浜松駅へ、そこから遠州鉄道に乗り換えて浜北駅へ向かいました。ハラハラの道中でしたが、



夏休みの活動風景

初めての試み

わかかな 神崎 衣代

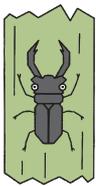
今年度の夏休みは、1日平均10人、12名の子どもをお預かりしました。主な活動としては、森林公園の木陰を散歩、施設内のプール、おやつ作りを行いました。また、オリーブの樹の利用者さんとともに、すいか割りや、カキ氷を作ったりしました。

わかかなの活動室が整備されたことや、子どもたちも増えたことから、毎年恒例となった過ごし方に、なにか変化をつけたいと思い、「わかかな外出」を実施することにし、夏休みを迎える7月より準備をしました。計画をしたのは、プレ葉ウォークでの昼食外出、コンビニでの買い物、うなぎパイ工場見学、掛川花鳥園への一日外出でした。

掛川花鳥園は、初めての一日外出で職員にとっては、これからの外出計画の基礎となるものでもありました。事前に、保護者の皆さんにご相談させていただきました。そのなかで「入園することも難しいかもしれない」と思った子どももいました。初めての外出で幾つかの不安を抱えながら実施しましたが、子どもたちの反応は様々。自ら腕にグローブをはめ鳥をとまらせようと必死な子、ドライブが楽しかった子、鳥よりも昼

食が楽しかった子など、予想以上の反応がありました。無事に外出を終え、職員から聞かれた言葉は「わかかなでも行けるね」でした。

今まで、職員不足等から、わかかなでは外出なんて無理だと思っていました。今回は、把握の面から利用の少ない日に計画を立てたため、期間中一度も外出に行けなかった子どもたちがいたのは次回の反省となる点です。方法を考え、場所を配慮すれば外出も可能だと知れたこと、保護者の皆さんに「思い出が増えてありがたいです。」と感謝の言葉をいただいたことで、職員にとっても大きな経験が出来た夏休みとなりました。



ちよつと一言

浜松の放課後支援を振り返る

毎年、学校がお休みになる夏休み前は、在宅障がい児のご家族は、どう過ごし、どう乗り切ろうかと頭を悩まされます。保護者の方にお話を伺った中で、生活リズムが乱れがちになり、目が離せずずっと一緒に過ごす中で、子どもも保護者も疲れ果ててしまう家庭も数多くありました。

小羊学園が現在の児童デイ・放課後支援事業を開始する以前に、平成8年に小羊夏期デイサービスという独自の自主事業を児童寮が中心になって行っていました。その後、育成会浜松養護学校(現特別支援学校)部会が企画し、学校で行なわれたサマースクールの無補助事業や浜松こども園の自主事業も行なわれたことによって、夏休み支援のニーズが飛躍的に伸びました。

平成14年に中区中沢で開設した「あつとほーむ」(現NPO法人あくしす)の事業に市単独補助事業が付き、法人内でもドルチェが補助事業で開始しました。制度が改変され、日中一時支援事業、児童デイサービス(II型)と変化していく中で、事業所数も増え、浜松市内には現在14の放課後支援事業所があり、児童期を支える大きな役割を担っています。

この外出を通して、放課後ではできない体験の中で、子どもたちの新しい一面を発見することができました。そんな新しい発見やエピソードを家族の方に話し、喜びを共有することも私たちのやりがいとなっています。今後子ども達の輝いた表情を引き出すことができる新企画を職員皆で考え、新しい発見をたくさんしていきたいです。

バスに乗ると手を叩いて喜び、行き交う電車で目を輝かせている子、窓からの景色を嬉しそうに眺める子：普段とは違う表情が見られました。なないろカフェでは、親切に対応して頂いたおかげで、子どもたちも居心地よく、自分で選んだメニューを嬉しそうに食べていました。

在宅支援センター ぱびるす 共同募金助成 報告



この度「赤い羽根共同募金」から寄付金をいただき車両を購入させていただきますました。ご寄付いただいた皆さまへお礼とご報告を申し上げます。

在宅支援センターぱびるすは、発達に遅れ等がある子ども達の通所施設です。現在、学校に入る前の幼児18名と学校に通う子ども15名が毎日通っています。幼児は家庭への送迎、学童は学校へのお迎えで車両を利用し、毎日に7路線程度の送迎があり車両はいつも不足していました。この度、10人乗りの車両を追加整備できゆとりをもった送迎ができるようになりました。

かわいいうロゴマークの入った大きな車に、子ども達も大喜びで利用しています。

助成額 135万7千円
用途 送迎用車両(日産キャラバンコーチ)

共同募金会を通していただいた、皆さまからの善意の寄付金を、右記のように利用させていただきました。大切に使用させていただきます。ありがとうございます。



温心寮内覧会行なわれる

紀伊半島を中心に日本列島に甚大な被害を及ぼした台風12号が接近していた9月2日に、温心寮移転改築工事完成の内覧会が行なわれました。

法人ではカトレアに続き2番目となる、住宅会社によるプレゼンテーションで㈱アキュラホームが施工され、内覧会の企画もしてい

いただきました。

荒天の中、法人内職員をはじめ、他法人のケアホーム職員や住宅関連業者の皆さまがお越しくださり、ホーム内を見学されました。

風通しが良く風景に溶け込んだ設計コンセプトに基づき、入居者の方がくつろげるリビングと広々とした個室やお風呂場を見学され、皆さん口を揃えて、「こんな家に住みたいなあ」と仰っております。



第3回

小羊学園ふれあい運動会

3年前からスタートした、小羊学園浜松地区の日中活動事業所による合同運動会が、左記の日程で行われます。観戦は自由ですので、皆さん応援に来てくださいね。

第3回

小羊学園ふれあい運動会

日時 10月7日(金) 10:00~
場所 浜北グリーンアリーナ
種目 徒競争(車椅子競争)、
大玉転がし、パン食い競争、
リレー
昼休みのイベントなどなど

問合せ 小羊デイケアホーム 舟橋
☎ 053-438-1498

小羊学園を支える会

2011年度寄付金報告

8月受付分 1,387,000円(26件)
累計 2,600,650円(122件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。
小羊学園を支える会事務局(鈴木)
三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

編集後記

この原稿を書いている日は9月11日、東日本大震災から半年経過した日である。日本を震撼させ全てが変わったあの日から、進まない復興・収束が見えない原発・経済再生など課題も多く残るが、私たちの心から徐々に絆が薄れつつあるのでは。現在も、避難所で暮らす人、深い悲しみが癒えない人、原発収束に向けて命を惜しまず働いている人がいることを覚え、祈る。10月の連休中に被災地支援に行く予定だが、あの日感じた心の痛み、衝撃、無力さを引き連れて、自分たちに何ができるか問い直してみたい。

朝夕涼しくなり秋の気配を感じる今日この頃です。夏の疲れなど残さぬよう、お体ご自愛下さいませ。(F)